

【研究ノート】

ウポポイにおける樺太アイヌのイヨマンテ展示

—研究教育機関における文化復興—

北原モコットウナシ・山道ムカラ・山田チケンキオ

要 旨：アヌココロアイヌイコロマケンル（国立アイヌ民族博物館）の常設展示には、樺太アイヌがクマの霊送り（飼いグマ送り）の際にクマを繋いだ装飾的な杭、およびクマ用装飾を身に着けたヒグマのはく製が展示されている。これらの品は、敗戦後に網走市周辺に移住した樺太アイヌによって作られたのを最後に60年ほど作られず、製作技法の継承も途絶えていた。このような状況下で、民族誌に記された情報や博物館資料の観察に基づく復元的な展示物製作は、アイヌ文化復興の要としてのウポポイのあり方を象徴する作業であった。本報告では、この展示物製作にあたって収集した情報の概要と、作業を通じて得た知見、今後の課題についてまとめる。

キーワード：アイヌ、クマ送り、信仰、イナウ、物質文化

はじめに

白老町の、民族共生象徴空間ウポポイの一部をなすアヌココロアイヌイコロマケンル（国立アイヌ民族博物館、以下イコロマケンルとする）の基本展示室（常設展示）には、樺太アイヌがクマの霊送り（飼いグマ送り）の際にクマを繋いだ装飾的な杭、およびクマ用装飾を身に着けたヒグマのはく製が展示されている（図1）。

祭具の製作には素材、工具、技術に関する知識と宗教的意義についての知識が関与する。しかし、こうした特別な祭具を作った経験のある方はすでに存命ではなく、直接教示を受けることは難しいのが現状である。また、資料から復元するとしても、クマ用装飾については一式がそろった完全な状態のものは実在しないという課題もあった。特に、クマを繋ぐ杭はその巨大さゆえに、実物の収集・保管が難しく、管見の限りは模型と画像しか残されていない。

そこで、製作に当たっては、資料をもとに製作物の形状と技術の復元をすることとした。このため、国内外の博物館資料と、民族誌や画像から得られる情報を集成した。サンクトペテルブルグのピョートル大帝記念国立人類学民族学博物館（以下、MAEとする）やロシア国立民族学博物館（以下、REMとする）に収蔵される民具資料や民族誌写真については荻原眞子氏・古原敏弘氏らによる調査によって知る所が多く、筆者（北原）自身は未見であった。幸いに、本資料の製作のため、イコロマケンルの職員に同行し、2018年に現地調査をすることができた。その後の

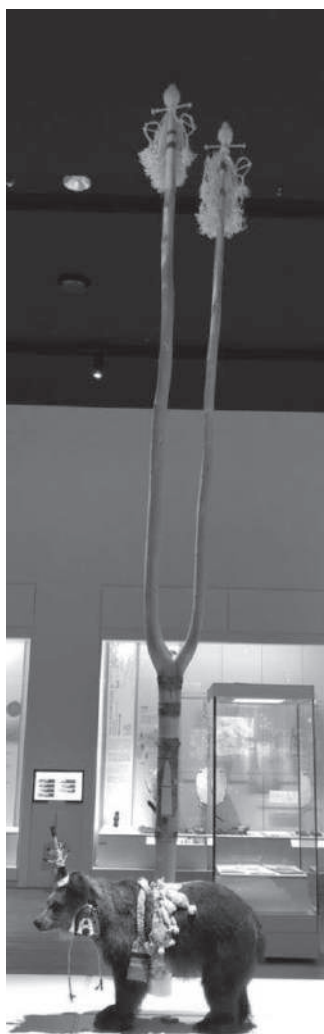


図1 国立アイヌ民族博物館 基本展示場
クマ繋ぎ杭と装飾されたクマ

政情によって、ロシア国内での調査は非常に難しくなり、このタイミングだからこそ可能になった調査であった。

ついで、ウポポイの工房に勤務する山道ムカラ、山田チケンキオを中心に素材や技術的な検討をし、2019年の年末から年明けにかけて、復元的に製作した。なお、素材の検討にあたっては網走市の北海道立北方民族博物館（以下、北方民族博物館とする）から後述する資料の貸出しを受け、イコロマケナルの仮収蔵庫にて、津田命子氏や古原敏弘氏、大坂拓氏（北海道博物館）ほかとともに資料を熟覧する機会を得た。特に、飾り帯の素材については、この機会に大坂氏から素材についての示唆を受け、後に文献の記述によってそれを裏付けることができた。このようにして、一連の資料製作にあたっては、国内外の多くの機関・個人の協力を得た。ここに記して感謝したい。以下、本報告では製作にあたって収集した情報の概要と、作業を通じて得た知見を報告する。1章を北原、2章を山道、3章を山田が執筆する。

なお、近年では、対外的には「アイヌ文化を絶やしてはならない」「アイヌ文化を広めたい」といった説明によって文化継承や普及に資する目的であることを謳いつつ、実質的には非アイヌがアイヌ文化を商用利用するケースが目につく。特に精神文化に関わるものは消費者の目を引くためか、関連語彙や造形を商品名やデザインに転用することが多い。アイヌによる文化復興の支援を目的とするのであれば、アイヌ民族の経済的困難や偏見など、文化実践の障壁を解消するための具体策を示す必要がある。そうしたことには関知せず、安易にアイヌ文化をコピーした商品を販売することを「知ってもらおう」ためとして正当化する姿勢は、アイヌ文化を築いてきた先人への敬意を欠く単なる盗用・剽窃である。

本稿において儀礼具の製作工程を検討した結果を公開する目的は、アイヌ自身による文化の取り戻しのために情報を共有することにある。読者諸氏には、本稿に掲載した情報を不適切な形で使用した事例を見かけた際には、注意喚起などの配慮をしていただければ幸いである。

1. 資料

はじめに、製作の対象とした祭具と、製作にあたって参照した主な資料について述べる。アイヌの飼いグマ送りの次第は、クマの霊魂と肉体が分離する前と後で大きく2つに分けられる。ここで製作したのは、主として霊魂の分離前に用いられるものである。

1-1. トウクシシ（クマ繋ぎ杭）

祭場に連れ出したクマを繋ぐ杭。アイヌ語ではトウクシシ（語義未詳）やポロイナウ（大きな木幣）と呼び、特徴的なY字形の木を用いて先端にイナウを結束する。先端部は高さを変えてあり、高い方が男性、低い方が女性だとされる。これらクマ送りに用いるイナウは、ツルコケモの実をつぶした汁で赤く着色することがある。

1900年前後に樺太でクマ送りを実見したB.ピウスツキの記述によれば、平均して10mほどの高さがある。北海道でもクマを杭に繋ぐが、大きくても2m弱で、まっすぐな木を用いる。ウリチの民族誌写真に、同じくY字形の大きな木が写っており、MAEが収蔵するウデへの資料にもよく似たY字形の杭がある。後述するイソクフ（クマ用飾り帯）などと合わせ、アイヌ文化と、より北方の民族との繋がりを示す要素だといえる。

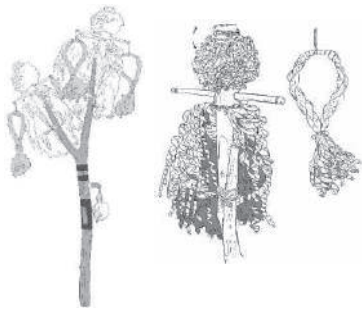


図2 北海道博物館蔵 89525

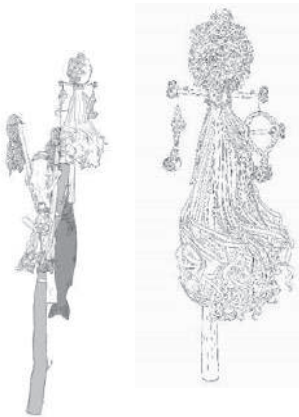


図3 北方民族博物館蔵 E576

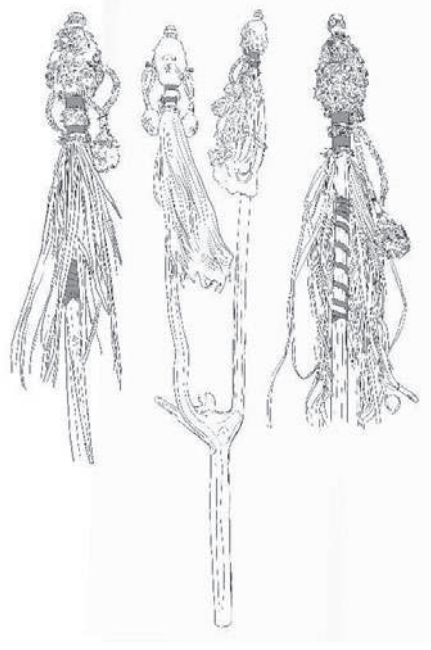


図4 MAE蔵 839-15

クマの性別に応じて素材となる樹種を変え、メスにはトドマツ、オスはエゾマツを用いる。形状も、画像や模型資料などで見るかぎり、かなりバリエーションがあり、二又の基部付近に別な横枝があるものや、クマの頭部を彫り出したもの（図4・中）、上部がY字ではなく5本に枝分かれしたものなどが見られる。

MAEと北海道博物館に、模型資料がある。今回の製作は、北海道博物館の資料（№89525、62cm）に依拠することにした（図2）。本資料は、樺太西海岸来知志出身者が、北海道移住後の1970年代に製作したと推測されるもので、更科源蔵が収集した。トゥクシシの胴にあたる幹には、樺太アイヌのイナウによく見られる平坦に削った面が作られ、刻印が施されている。印より少し上で幹が二又にわかれ、それぞれの先端にイナウが結束されている。イナウの中ほどに穴を空け、そこに横棒を通す。棒の先にはイナウキケ（削りかけ）を擦って作った輪が吊り下げられている。輪の先端には、エプシシと呼ぶ小さなイナウを差し込むことがある。樺太東海岸で収集された資料には、2本のイナウのうち一方には輪を下げ、もう一方には輪にせず撚りひも状のままのイナウキケを下げた例もみられる（図4）。女性のイナウには輪をつけ、男性のイナウには撚り紐状のものを下げるといふ（北原2014：103）。

この資料によって全体の形状はわかるが、模型であるため実物とは各部の大きさのバランスが異なる。そこで、ピウスツキが撮影した写真¹など画像を参照し、大きさのバランスを調整した。トゥクシシの側に立った成人男性と比べると、全体の大きさと比率がうかがえる。

写真には、トゥクシシの製作過程を写したものもあり、先端に結束するイナウも映っている。

これを見ると、イナウだけで 10 歳～12 歳に見える子どもと同じくらいの大きさがあることがわかる。このイナウについては、北方民族博物館の資料 (E576、65cm) をモデルとした (図 3)。こちら、北海道博物館の模型と同じ作者による製作と見られる。なお、今回の製作にあたっては、イコロマケナルの基本展示室の天井が 6m であったため、設置台とトゥクシシ・イナウを繋いで 6m に近い高さになるように調整した。また、参照した模型には、二又基部付近に横枝があり、そこにもイナウが下げられているが、入手できた素材にはそのような枝がなかったため、この部分は割愛して製作した。

1-2. イソクフ (クマ用飾り帯)、チプイヌフ (耳飾り)、イソキラウ (クマ用頭飾り)

祭場に連れ出したクマは、手の込んだ装飾で飾る。ピウスツキや知里真志保の記述によれば、これらはいずれも、クマをトゥクシシに繋いだ状態、つまりクマが生きているときに着けさせた。2 歳から 3 歳に成長したヒグマを保定して装飾を付ける作業は危険を極め、これを執り行うことは名誉とされた。北海道でも東部や北部では、飼いグマ送りの際に、背当てや耳飾りなどの晴着を着せる。例えば、釧路市博物館が収蔵する資料 (56003) は、木綿布に刺繍で装飾を施した背当ての例である (アイヌ民族文化財団 2018 : 136)。樺太では、背当てに当たるものをイソクフ (クマの帯) と呼び、耳飾りをチプイヌフ、頭飾りをイソキラウ (クマ角) と呼ぶ。写真や絵画資料も残されているが、製作の参考にできるものはほとんど無いため、主に実物資料を参照した。



図 5 セタキラウ(イヌの角)

イソキラウはイナウキケを主たる素材として作られる

もので、北海道には見られない。樺太アイヌの故地である南樺太は犬ぞり文化の南限といわれ、そりイヌにセタキラウという頭飾りを付ける (図 5)。これはニヅフ文化やウリチ文化など、アムール川流域にも見られるもので、ウマの毛を染めたものを編んで作られる。イソキラウとは素材や製法が異なるが、動物に用いる頭飾りであるという点では関連付けて考えるべきものかもしれない。



図 6 北方民族博物館蔵 E562

国内では東京国立博物館に明治期のイソキラウが現存する (28104)。これは、非常に複雑な構造をしており、製法を理解するためには CT 等での解析が必要だと思われる。北方民族博物館に、クマのはく製に着けられた装飾一式が収蔵されている (図 6 E562)。これは、敗戦後に樺太から移住した樺太アイヌが、網走市で举行したクマ送りに際して作ったものと考えられ、比較的新しい資料である。海外の資料としては、MAE にイソクフ (MAE829-339、829-340) とイソキラウ (700-234)、チプイヌフ (829-510) が、REM にイソクフ (2816-62) が、良い状態で収蔵されている。特に MAE の資料は、収集のために製作されたと見られる新しいもので、構造が理

解しやすい。

イソクフは、知里によれば、もっぱらオオカサスゲで編まれる。遠目にも目につきやすいので、戦前に撮影された樺太のクマ送りの写真を観察すると、イソクフが写り込んでいるのがわかる(図7)。ピウスツキの記述を見ると、イソクフの製作は、霊送りに集まった人々が女性・男性の別なく手掛けていたことが書かれている。知里によれば、クマの雌雄によって帯の編み方を変え、メスの場合は断面が楕円になるように、オスの場合は断面が四角くなるように編むという(知里 1976 : 218)。今回は、展示用に入手したはく製のクマがメスだったので、メス用の帯を編むこととした(図8)。



図7 北海道大学図書館蔵

この帯には、大小数十個の小さな袋が取り付けられており、中にはクマ送りの際の料理が詰められた。また、クマの性別に応じて女性の生活用具、男性の生活用具の木製ミニチュアが取り付けられていることもある。これらはすべて送られるクマの土産となる。また、クマを矢でしとめたのち、クマから外したイソクフをトゥクシシに掛け、トゥクシシに上る競争をしたともいう。なお、ニヴフ文化の資料とされる博物館資料にも、イソクフとよく似たクマ用帯が見られる。北方民族博物館と REM の資料は、帯に直に袋類を繋いでいる。これに対し MAE の資料 (MAE829-339、829-340) は、帯とは別にイナウキケを格子状に編んで枠を作り、それに袋やミニチュアを固定した上で、帯に結びつけている。

チプイヌフは、名称の上では人用のピアスと共通するが、形状はイナウキケを U 字形に曲げて布に縫い付けるなどして固定したもので、ビーズなどで装飾されたものもある。比較的古い資料として、北海道大学植物園、国立民族学博物館、東京国立博物館などの収蔵品がある。東京国立博物館の資料 (K-28107) のように、大小2つのチプイヌフが重なるように作られているものもある(アイヌ民族文化財団 2018 : 140)。

古い資料を観察すると、イナウキケなどの素材のなかに、煤で黒ずんだものと、煤が無く色が明るいものが混在していることがわかる。北方民族博物館の資料は1度しか使用されていないが、クマ送りが頻繁に行われた北海道への移住前には、おそらく儀礼のたびに同じ装飾が繰り返し使用され、使用のたびに新しいイナウキケが加えられていったものと考えられる。そのために、1つの装飾に新旧の素材が混在するようになったのだろう。

小括

上述の通り、トゥクシシとクマ用装飾の資料は、製作地や年代が異なる資料が国内外に散在している。そのうち今回の製作にあたっては、トゥクシシは北海道博物館 (№89525) と北方民族博物館 (E576)、イソクフは北方民族博物館 (E562)、チプイヌフは東京国立博物館 (K-28107)、イソキラウは MAE (700-234) の資料を参照することとした。トゥクシシは西海岸来知志の資料だが、他は製作地域が未詳である。複数の地域の資料の寄せ集めとはなったが、初めての試みでもあり、開館までの期間が限られていたこともあって、製作法がわかるものを選んで組み

合わせる事となった（図8～10）。

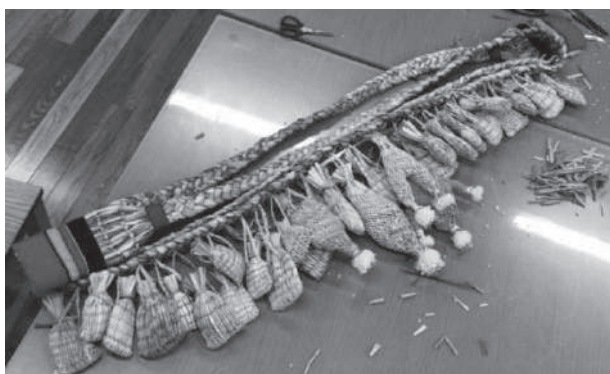


図8 飾り帯と袋（製作）



図9 チプイヌフ 耳飾り（製作）



図10 イソキラウ 頭飾り（製作）

2. 樺太地方のイナウ製作技法の復元

北海道のイナウについては様々な場面で製作する機会があるが、樺太のイナウについては資料や文献上で見ることはあっても、実際に製作する機会は乏しい。前章で見た資料について、当初は形状を復元することのみを想定していたが、協議をする中で製作技法についても検討し、可能な範囲で実践することとなった。なお、素材として用いた樹木は、白老町との協定により、2018年に町有林で伐採して用いた。マツ類はヤニが多いことから、約1年にわたって屋外で乾燥させ、加工を行った。

2-1. 工具

樺太と北海道では、イナウケ（イナウ製作）に用いる刃物の形状に差がある。北海道では、右刃で少し細身の切り出し小刀の先端にマキリエウシペやエピラウシペなどと呼ぶ木片を取り付けて使用する。この木片は一種のガイドとなり、これによって木を削る際に、常に刃の同じ部分が木に当たるようになる。また、本州の削り花に使用されるハナカキナタという刃物は、刀身がはじめからガイドが付いた形に作られている。同様のものが北海道でも用いられており、どちらも「イナウケマキリ」と呼ぶ。筆者（山道）が普段使用しているイナウケマキリは、このタイプである。

これに対し、樺太アイヌの刃物は図11のような形状をしている。刃が少し緩やかな曲線を描く短い左刃の刀身が用いられ、柄も緩く湾曲している。こちらも「イナウケマキリ」と呼ぶが、

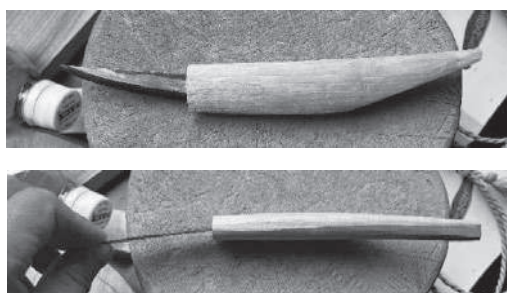


図 11 樺太の小刀（製作）

ほかに「チェーイキマキリ」とも呼び「左マキリ」という日本語の通称でも呼ばれる。

北海道・樺太ともに共通して、刃はあまり鋭利にしない。イナウケを始めるためには、まず研ぎ方から覚えなければいけないといわれるほどであり、市販の刃物では鋭すぎるので、研ぎ直して使用する必要がある。

製作にあたり、樺太で使用されてきたイナウケマキリの復元から試みた。形状やサイズは国

立民族学博物館に所蔵されているイナウケマキリ（K0002565）を参考としたが、実物を計測することは時間の制約から難しかったため、サイズは図録などの情報を参考にした。素材には左刃の切り出し小刀を使用し、グラインダーで整形した後、荒砥石で刃付けをし、中砥、仕上げの順に研磨を行った。研ぎ終わったものを金槌で叩いて刃を湾曲させた。使用した小刀は焼き入れが甘く、硬い刃ではなかったので、熱を加えたりはせずに整形をした。柄も資料のサイズを参考に製作した木製の柄を取り付けた。ただ、実際に使用すると私の手には少し小さかったので、革ヒモを巻くなどして太さを変え、使いやすいう調整する必要があった。後述するように、この刃物は逆手に握るため、柄の端は親指を当てやすいよう斜めにカットした形状も特徴である。製作を通して気づいた点としては、柄を刃に合わせて湾曲させることが重要であり、全体のサイズを使用者の手に合わせることで使いやすさが向上する。

2-2. 作業姿勢

次に削り方の違いを見てみたい。北海道では図 12 の左のように小刀を順手に持ち、刃を身体に向けた状態で遠くから手前へ引き寄せるように削る。樺太では小刀を逆手に持ち、刃が身体の方に向くように削る（図 12・中）。刃の当たり方が図のようになる。北海道とは刃の当たり方が逆になり、刃の角度も北海道ではやや起こし気味になる。

それから、北海道では材に対して小刀が床と並行になるのに対し、樺太では少し立て気味になる。また、手首も手前に引くようにして小刀を持つ。これらは写真などの資料から確認することができるが、実際に作業をしてみたことで、この手首の角度が重要であると気付いた。手首が前方へ向いたまま削ると巻きがきつくなり、削り掛けが短くなってしまう。材を持つ手の位置も変わってくる。北海道の削り方では、持ち手が体に対し中心から左側に寄るが、樺太の削り方は右側に寄せる必要がある。長い削りかけを作るためには、手を引いた時に肘が身体に当たらないようにしなければならない。平素は、北海道の削り方でイナウを製作しているため、

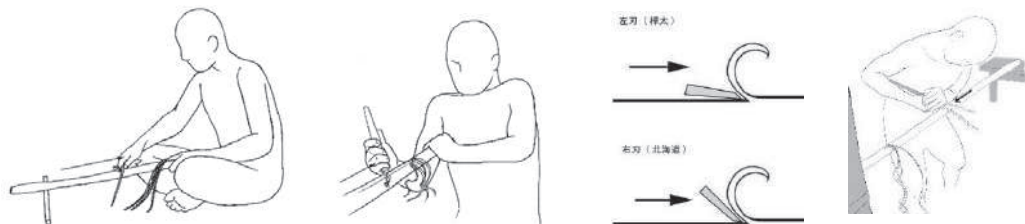


図 12 作業姿勢（左：北海道 中央：樺太 右：ボルネオ）

持ち手が中心から左寄りになる癖があり、最初は長い削りかけを削りだすことができなかった。

作業姿勢は、座って削る方法が一般的であり、日常で使用するサイズのイナウであれば、このような削り方で問題はないが、トゥクシシに結束する場合は特別大きなイナウが用いられるため、姿勢や削り方も工夫をした。知里が樺太東海岸白浜村で記録したノートには、トゥクシシについて書かれた箇所がある。そこには「又から下の長さが七尺、二股になった枝の長さが二ヒロ半あり、先端のイナウ部分が五尺位で、歩きながら削る」と記されており、歩きながら削るという方法に着目をした（北原 2014）。この方法はより長い削り掛けを削るためには有効な方法と思われるが、このような手法では材を手を持ちながら削ることが難しいため、材をどこかに固定して製作したと考えられる。北原が、今石みぎわ、山崎幸治とともにボルネオ島のブラワン民族の村で調査をした際には、素材を水平に固定し、刃物を当てて歩きながら削ることでイナウ状の木製品を製作する技法を確認している。知里の記述はボルネオでの手法に類するものと考えられ、これを参考に素材を固定して削ることを試みた（図 12・右）。

これとは別に、素材の先端を壁に押し当て、立って削る方法を試みた。この方法でも削ることはできたが、必要な長さを一度に削ることは難しく、一度体制を整えて再び削る点は同じであった。そのため、慣れるまでは途中で削りかけの厚みが変わり、切れてしまうことも多かった。

イナウの頭部には、密集した短い削りかけをつくり出す。密集部は、短い削りかけが軸の周囲をらせん状に巡るように削る。このとき、削り始めと削り終りを短く、中間部を長めに削ることで、密集部の外観が球形になる。様々な資料を見ると、頭部を削る際には刃物を手前に引いて削ったものと、押し出して削ったものが見られる。今回の製作では、高い方のイナウでは筆者（山道）が押して削り、低い方のイナウは北原が引き寄せて削る技法を用いた。

2-3. 削り掛けの二次的加工

イナウの削りかけは、削った後に撚る、編む、あるいは伸ばすといった二次的加工が加えられることがある。手間をかけた物ほど良いイナウとされる。樺太では削りかけの基部から先端付近までが真っすぐに伸びて先端にだけ撚りがかかったものがある。新十津川町や浦河町、ウイルタ民族のイナウにも同様のものが確認できる。トゥクシシ（模型）と同じ作者が作った、同型のイナウも、こうした二次的加工が施されている（図 3）。このような削り掛けを作る方法について、管見の限り聞き取りによるデータは無いため、今回は北原の推測した方法で加工をした。まず長い削りかけを作り、それを一枚一枚途中まで手で伸ばしてからヒモで束ねて乾燥をさせた（図 13）。なお、ピウスツキの写真の中にも、同様の手法で整形をしていると見られる場面がある。



図 13 削りかけ二次加工

小括

このように、現在では用いられていない技法であっても、実物資料の観察などによって復元が可能な場合がある。文字資料による情報も重要だが、言語化が難しい情報もあり、文献のみでは必ずしも実践に必要な情報がそろわないことも多い。写真資料や映像資料などが残ってい

る場合には、手の角度や持ち手の位置、刃物の使い方、削る順序や二次加工などの技法をより詳細に知ることができる。ただ、力を入れ方や刃の角度など細かな刃物の扱いについては感覚による部分が大きく、実際に製作することで認識できることが多い。

3. イソクフに付ける袋の製作

次に、イソクフ（図 8）とこれに付ける袋類の製作にあたって検討した事項を、3 つに分けて述べる。

3-1. 素材

2018 年から、北方民族博物館の資料をもとに復元のための検討を開始した。当初は、ガマの葉を使用しているのではないかと思われたが、資料を熟覧した大坂拓氏より、オオカサスゲの茎ではないかとの助言を受けた。知里真志保の『分類アイヌ語辞典 植物編・動物編』でオオカサスゲの項目を調べると、樺太ではイソクフにオオカサスゲを使用したという記述を見つけることができ、推測を裏付けることができた。

2018 年 8 月に、千歳市内の長都川周辺でオオカサスゲを採取。翌 2019 年 8 月にも、白老町内で採取した。

3-2. 緯材を使用する技法

イソクフに付ける袋類には、製法によって大きく 2 つのタイプがある（図 14 および図 15）。まず、緯材（横糸に相当する素材）を使用する技法について述べる。この技法は、サラニブと呼ばれる袋・籠類の編み方のうち素材を吊るして編む技法に似ている。筆者（山田）はこの技法による製作の経験があったため、比較的容易に製法を理解することができた。このようにして編まれた袋は、方形になる。北方民族博物館所蔵資料には、こうして編まれた袋が 17 点ある。すべて同じ編み方に見えるが、少しずつ材料の本数や編み方の違いがあるため、仕上がりも異なる。このことから、本資料の製作は数名が行った可能性が考えられる。袋の内には、料

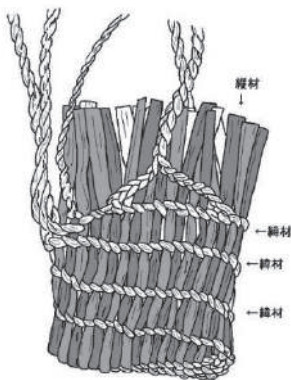


図 14 緯材を用いる袋（製作）
製法を示すため、図では素材を色分けした。

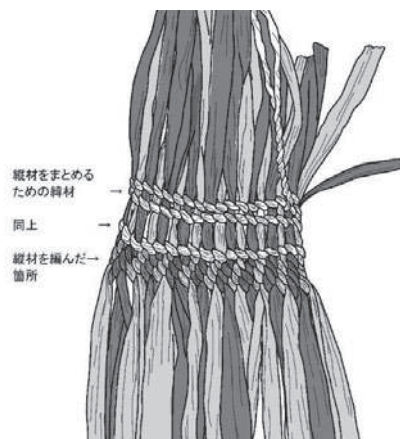


図 15 緯材を用いない袋（製作過程）
図の下に向かって編む。

理などを詰めるというが、今回は展示品であることから、腐敗する可能性の低い生の米を入れることとした。

3-3. 緯材を使用しない技法

緯材を用いない技法では、初めに縦材を筒状に編み（この時だけは緯材を用いる）、袋本体部分は縦材どうしを絡めあうことで編み進めていく。これは、先述のセタキラウ（イヌ用頭飾り）の角部分と同じ編み方である。

この技法によって作られる袋は3種類あり、筆者（山田）にとっては、これまで未経験の技法であったため、北原、山道とともに検討しながら進めた。

1 つ目は、袋の上から編み始め、真中あたりから二股に分けてモンペのような形に編み上げる技法である。これは、容易に進めることができた。2 つ目は、袋の途中から編み方を反転させ、帯のような段をつける編み方である。この技法を用いると、袋の中央付近に輪状の凸部ができることから、この袋をアカンコロトホタ（輪を持つ袋）と呼ぶ（図 16）。

この技法の習得は、スムーズとはいかなかった。帯のようなところから編み方を変え、そのまま進行方向に編んでいくと、編み目が左下がりになってしまった。そこで山道からのコメントにより、逆方向に戻りながら編んでいくと資料と同じものが完成した。

3 つ目は、キラウコロトホタ（角を持つ袋）と呼ばれる、袋の途中から腕のようなものがつく編み方である（図 17）。こうした形状に仕上げる方法は複数考えられたが、北原の観察により、袋本体と腕状のパーツを別を作り、つなぎ合わせる手法を採用した。これは大変技術を要する工程で、資料の製作時は全て山道が担当した。本報告に際し、改めて山田自身でも製作し、腕のような部分を本体から編み出すことも可能だということが判明した。

MAE の資料（MAE829-339、829-340）は、これらとはまたわずかに形状や技法が異なっているため、こちらも試行を重ね、同じ形状のものを製作できるようになった。



図 16 アカンコロトホタ
輪をもつ袋（製作）

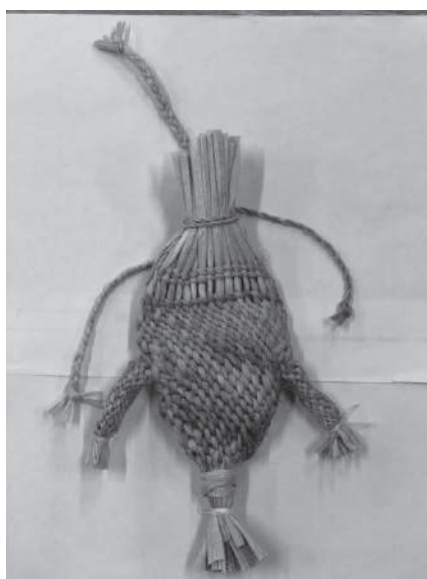


図 17 キラウコロトホタ
角を持つ袋（製作）

小括

復元のための検討を通じ、手仕事の伝承は、実物資料からも可能であることを再認識した。作業はしばしば深夜にまで及んだが、樺太の先人たちをそばに感じ、リラックスして作業にあたることができた。多くの人々と共同で調査をし、意見交換をすることの重要性も改めて認識した。ウポボイの開業準備から数えて、約5年がたったが、今回の報告を機に、改めてウポボイの職員間における技術の共有ができたことは望外の出来事であった。

おわりに 研究と実践の融合

本報告で取り上げた展示資料製作は、80年代から90年代にかけての在外アイヌ資料調査の成果にも立脚し、北原自身の調査も含め、約30年の蓄積によって行われた。民族共生象徴空間は、アイヌ文化復興の拠点に位置付けられる機関であり、このような研究と実践を融合する形での文化復興が、今後一層盛んになることが望まれる。そのためには、研究・実践の体制を支えるべく、必要な時間や素材、作業場所の確保のために、組織として適切な制度を整えていく必要がある。

一方、これとは別に見えてきた課題もある。その1つが、宗教的に重要な物品を研究対象とする場合、その製作技法を、どの範囲の人々にどの程度共有するか、といったことである。こうした課題についての検討も、喫緊の課題として今後の議論が活性化することを望む。

注

- 1 たとえばREMが収蔵する写真資料(2448-95~2448-104)など。左の資料は、荻原真子、古原敏弘らが2007年に刊行した『ロシア民族学博物館所蔵アイヌ資料目録』(草風館)に掲載されている。

引用文献

- (財)アイヌ文化振興・研究推進機構編
2011 『千島・樺太・北海道 アイヌのくらし—ドイツコレクションを中心に—』(財)アイヌ文化振興・研究推進機構、札幌。
- (公財)アイヌ民族文化財団編
2018 『キムンカムイとアイヌ—春夏秋冬—』(公財)アイヌ民族文化財団、札幌。
- 犬飼哲夫、名取武光
1940 「イオマンテ(アイヌの熊祭)の文化的意義とその形式(二)」『北方文化研究報告』3: 79-135。
今石みぎわ、北原次郎太
2015 『花とイナウ—世界の中のアイヌ文化—』北海道大学アイヌ・先住民研究センター、札幌。
大林太良
1985 「熊祭の歴史民族学的研究—学史的展望—」『国立民族学博物館研究報告』10(2): 427-449。
荻原真子、古原敏弘編
2002 『ロシア・アイヌ資料の総合的調査研究—極東博物館のアイヌ資料を中心として Ainu Collections in Russia— 文部省科学研究費補助金2000-2001年度(基盤A-1)研究成果報告書』千葉大学文学部、千葉。
- 荻原真子、古原敏弘、ゴルバチョーヴァ、ヴァレンチーナ V. 編
2007 『ロシア民族学博物館所蔵アイヌ資料目録』草風館、浦安。
- 萱野茂
1978 『アイヌの民具』すずさわ書店、東京。
- 北原次郎太
2014 『アイヌの祭具 イナウの研究』北海道大学出版会、札幌。

金田一京助、杉山寿栄男

1973(1943) 『アイヌ芸術』北海道出版企画センター、札幌。

クレイノヴィチ, E. A.

1993 榎本哲 (訳) 『サハリン・アムール民族誌—ニヴフ族の生活と世界観』法政大学出版局、東京。
関根達人、菊池勇夫、手塚薫、北原モコットゥナシ編

2022 『アイヌ文化史辞典』吉川弘文館、東京。

知里真志保

1976 『知里真志保著作集 別巻1 分類アイヌ語辞典 植物編・動物編』平凡社、東京。

名取武光

1987(1941) 「沙流アイヌの熊送りに於ける神々の由来とヌサ」『北方文化研究報告』4: 35-112.

西鶴定嘉

1973(1942) 『樺太アイヌ』みやま書房、札幌。

ピウスツキ, B.、高倉浩樹監修、井上紘一訳編・解説

2018 『プロニスワフ・ピウスツキのサハリン民族誌～二十世紀初め前後のエンチウ、ニヴフ、ウイ
ルタ～ (東北アジア研究センター叢書第 63 号)』東北大学東北アジア研究センター、仙台。

和田完

1999 『サハリン・アイヌの熊祭 ピウスツキの論文を中心に』第一書房、東京。

(きたはら・もこつとうなし／北海道大学)

(やまみち・むから、やまだ・ちけんきお／民族共生象徴空間ウポポイ)